

著：影山 幸雄

解剖を実践に生かす 図解 泌尿器科手術

評者：大家 基嗣(慶應義塾大学教授・泌尿器科学)

手術は記録を通して客観性をもつのではないだろうか。手術記事では個々の症例でどのような手術がどのような時間軸で施行されたかが記録され、第三者が読んで手術の過程がわかるように記載されている。これとは別に、手術を行う医師は、自分自身の手術の習熟のために、手術記事に記載するにはあまりに主観的な「手術ノート」を作り、先輩の医師に習ったこと、今後改善すべき点などを詳細に記載し、後生大事に持っていることが多いのではなかろうか。手術前にノートの記載とスケッチを眺めながらイメージを描き、手術に臨む。手術の終了後は加筆を行い、ノートの「改訂」は繰り返されていく。この地道な過程こそが上達への定石であり、この記録を通して、先輩の医師は後輩に技量を伝授してきたのではないだろうか。個々の症例では手術は1回きりである。なんと少しでも全力を尽くさなければならない。より良い手術を継続的に実践するためには、手術自体の客観性を担保しなければならない。そのためには、学会で勉強し、意見を交換するだけでなく、手術書あるいは文

献を紐解き、常に自らの手技に批判的な視点をもつ必要がある。

おそらく著者はより良い手術を求める過程で、自らが集積してきた詳細な術中のスケッチを通して技術を磨いてきたのだと思う。著者は東京医科歯科大学の木原和徳教授とともにミニマム創手術の確立に多大なる貢献をしてきた。本書では膜の解剖を徹底的に理解し、これ以上の解析は無理であろう、あるいは手術にはそれ以上必要はないであろうというレベルまで考察して泌尿器科手術に応用している。この考察はミニマム創手術の確立に必要な過程であったのかもしれない。

学問の方向性の1つとして、錯綜する知識から共通の原理を発見するということがある。おそらく著者が泌尿器科手術をそういう学問としての立ち位置から解析して、たどり着いた原理が、「血管の分布は人によって異なるものの、膜構造のうちのどの層を走行しているかについては例外がない。血管そのものが今どこを剥離しているかを教えてくれる」ということであったと思う。本書を通じて具体的な手術手技を学ぶだけ

でなく、この原理を知った読者が手術をどのように変貌させていくかを著者は読者に問いかけている気がする。

本書の特徴の1つとして、手術の行程を示していくイラストに省略がない。1つずつの行程を丁寧に記載してある。そのことが、若い医師でも、あるいは熟練した医師にでも新たな発見を享受できる基盤となっている。

手術を系統的に学びたい若い医師にとっても、手術に客観性を持たせたい上級医師においても学ぶことの多い書であるといえる。本書はミニマム創手術を行っている泌尿器科医だけでなく、通常の切開手術あるいは腹腔鏡手術を行う医師においても参考になるエッセンスが詰め込まれている。泌尿器科医のあらゆるニーズに対応した好著といえるのではなかろうか。

● A4 頁312 2010年
定価 12,600円
(本体 12,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01021-4]
医学書院刊